

特別支援学校幼稚部における就学支援の取り組み

～障害を併せ有する幼児への連携した取り組みを通して～

高橋 幸子* 大蔵 みどり* 上田 みどり* 福谷 憲司* 仲野 みこ*
吉井 勘人** 上仮屋祐介*** 野村 勝彦**** 田丸 秋穂*****

知的障害特別支援学校幼稚部に在籍する幼児への就学支援の取り組みについて、運動発達に課題がある幼児の事例を通して整理した。保護者の願いや思いを受け止めるとともに何より幼児にとって適切な就学先を選ぶ観点やスムーズな移行に向けての有効な引き継ぎ資料のあり方など、肢体不自由教育機関や療育機関と連携しての支援のあり方を検討した。

1. はじめに

「国連障害者権利条約」批准の動向を受け中央教育審議会は「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」を設置し2012年7月23日には「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」を公表した。その中では、就学相談・就学先決定について「市町村教育委員会が、本人・保護者に対し十分情報提供をしつつ、本人・保護者の意見を最大限尊重し、本人・保護者と市町村教育委員会、学校が教育的ニーズと必要な支援について合意形成を行う」ことを原則としている。本人の教育的ニーズの丁寧な把握による必要な支援の見極めはいうまでもないことだが、特に障害を併せ有する幼児にとって、就学先の決定にはどのような手だてが求められるであろうか。

本稿においては、特別支援学校（知的障害）幼稚部（以下 知的障害幼稚部）に在籍するが、運動発達面の課題がある幼児（以下 A 児）の就学支援について、他機関との連携の取り組みを報告する。

2. 知的障害幼稚部における取り組みについて

（1）就学に向けての支援

2009（平成21）年に施行された「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」において、小学校との連携の推進に関する内容が盛り込まれた。同様に「小学校学習指導要領」には、保育所ならびに幼稚園との連携が明記されている。特別支援学校小学部においても、幼稚部や療育機関、保育所幼稚園との間で、当然同様の取り組みがなされている。

知的障害幼稚部においても、就学先を検討する段階からすでに様々な機関との連携が始まる。就学に向けての

支援の主な取り組みについては Table1 の通りである。

なお、就学に向けての保護者への説明では、下記のような資料を配付している。資料の主な内容は次の通りである。

- ①就学に向けてガイダンス（Table 2）
- ②就学先検討の観点（Table 3）
- ③学校見学メモ（後述）

（2）就学支援での課題

これまで、就学支援に関わってきた中で課題になってきたことは以下の通りであった。

①移行（入学）先の情報が不足している。

保護者は、早い場合は年中の時から多くの学校を参観し始める。学校説明会はもちろん、運動会や学習発表会、バザーなどの行事にも足を運び、情報収集に努めている。しかし、求めている情報が必ずしも得られるわけではない。前述の「観点」から情報収集を試みても、例えば「学習内容」がどのように保障されるかは見えにくい。

②保護者のニーズと適切な就学先の調整が難しい。

いくつかの学校を見学した後も保護者の悩みはつきない。「家から一番近い B 校は、教育内容の点で合わない」「C 校は環境的に整っているが、送迎が難しい」など、「就学先検討の観点」で伝えているように、100%満たされるところはないとの認識の後、どのように優先課題をつけていくかが重要である。

③障害を併せ有する幼児の就学先決定が難しい

知的障害の他に聴覚障害、運動発達の遅れ等が見られた場合に、どのような観点で就学先を考えていくか、保護者に対する有益な助言も難しい。他の障害について専門性を有する他機関との連携が不可欠である。

*筑波大学附属大塚特別支援学校 **山梨大学 ***鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 ****作新学院大学 *****筑波大学附属桐が丘特別支援学校

Table 1 幼稚部の就学支援

	主な予定 *は個に応じて実施
	「個別的教育支援計画」策定
4月	就学について面談 居住地教育委員会訪問*
5月	学校見学同行 居住地での交流*
6月	個人面談 交流開始* 地域の就学相談開始 「個別的教育支援計画」改訂
10月	就学資料作成 個人面談・就学先決定
12月	移行支援資料作成 体験入学同行
2月	支援会議・引き継ぎ 就学先コーディネーター来校*

Table 2 就学に向けてのガイダンス

【就学相談は何のために？】(参考 海津敦子「発達に遅れのある子の就学相談」より)
特別な支援を必要とする子ども本人の気持ちを第一に、保護者と専門家（心理学的、医学的、教育的立場から）が、十分に意見や知恵を出し合い、子どもが楽しく満たされた学校生活ができる就学先を考えるために設けられています。

【就学相談で伝えるべきこと】

- ・これまで、どのような環境の中でどのような育ちが見られたか
- ・これから、どのような育ちを望んでいるか（どんな大人になってもらいたいかなど）
- ・そのためにどんな力をつけて欲しいと願っているか
- ・どのような支援を必要としているか(具体的に重要度の高いほうから)
- ・そのためにどのような環境で教育を受けさせたいか
- ・家族としてどのように生活していきたいか
- ・不安や不思議に思っていること、わからないことは何か

【学校見学のポイント】

うちの子がここに通ったら…？という観点で。

- ・ここにこしているかな？
- ・おともだちはできるかな？
- ・先生の話、わかるかな？
- ・たくさんしたこと、身につけられるかな？
- ・家族も楽しく通えそうかな？
- ・困ったときの支援はだいじょうぶかな？

Table3 就学先検討の観点

お子さんにとって、保護者・家族にとってどうであるのか、総合的に考えていきましょう。

通学について

- ・経路・混雑状況、安全について、登下校の時間帯に確認しましょう。
- ・お子さんにとっての通学の負担、家族にとっての送迎の負担について想定しておきましょう。

教育内容について

- ・個に応じた指導、集団のダイナミズムを活かした指導、お子さんの様子に合わせてより適切に展開される見通しが持てる場を求めています。
- ・お子さんの個別教育計画上の課題について指導場面が確保される場を求めています。

環境について

- ・物的環境（学校の位置、広さ、校舎の作り、遊具、教材・教具の整備状況など）
- ・人的環境（大人—専門性、学級・学年・学部・全校・地域、PTA 活動など）
子ども一同級生、上級生、障害のない児童との関わりなど）

*100%満たされるところはないと考え（中略）さまざまな側面から、お子さん・家族にとってよりよいと思われる教育の場を選択していきましょう

(3) 事例を通しての取り組み

知的障害幼稚部に在籍した運動発達面の課題がある A 児の就学支援の取り組みは下記の通りである。

①対象児について

生育歴

- 4ヶ月・・・定額
- 1歳過ぎ頃・・・発達の遅れを感じ始める。
- 1歳2ヶ月・・・寝返り
- 1歳4ヶ月・・・染色体検査をしたが異常なし
- 1歳6ヶ月・・・理学療法、作業療法開始
- 1歳10ヶ月・・・幼稚部子育てひろば参加開始
- 1歳11ヶ月・・・Mowat Wilson(モワットウィルソン)症候群と診断される
- 2歳7ヶ月・・・療育機関に2ヶ月の母子入院
- 3歳7ヶ月・・・知的障害幼稚部に入学

②知的障害幼稚部での育ち (Fig. 1)

前回報告したように (高橋他 2012)、知的障害幼稚部においては、連携機関からのアドバイスを受け、一緒に活動する中で友だちへの関心を育てることを優先的取り組みとした。それが、A 児の動きたい、動こうとする意欲を高めると想定したからである。巡回指導等で来訪した PT,OT から何よりも強調されたのは、A 児が「友だちといっしょに活動しているという実感を持つということ」、「いっしょに動きたいという意欲を育てること」であった。生活の流れの中で、本児の気持ちに沿う形で運動発達支援を行うことをめざした。幼稚部の環境の中で、関わりたい、やってみたいという意欲の芽生えに最大限応えていくことに配慮した。このように他機関との連携の中で知的障害専門の機関としての役割が鮮明に

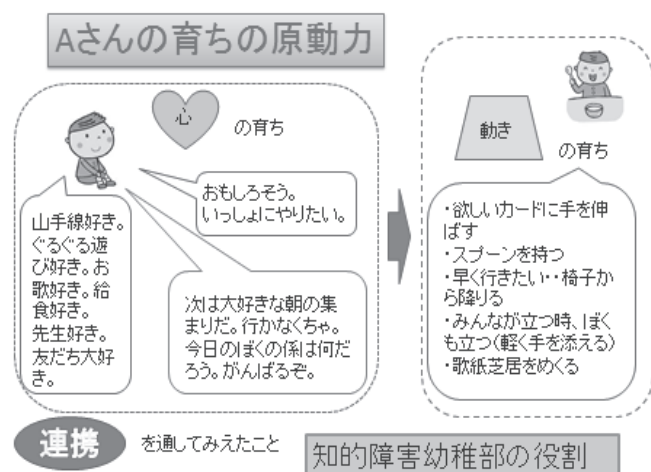


Fig. 1 運動発達を促す知的障害幼稚部の取り組み

なった。Fig. 2 は、友だちと活動することで SRC ウォーカーの活用が促された様子の一場面である。

③ A 児の就学支援

Table 1 で示した幼稚部の就学支援手続きに基づき、取り組まれた。おおよその流れは、Fig. 3 の通りである。保護者が作成した学校見学メモの一例を改変したものが Table 4 である。

連携先の桐が丘特別支援学校コーディネーターからは就学相談に関わった記録の提供を受け (Table 5)、運動発達に課題のある A 児の就学先を検討する指標の一つとなった。

就学先が決まった後は、資料をもとに引き継ぎを行った。「個別的教育支援計画」の引き継ぎにおいては、これまでの到達点を確認し今後の課題について共通理解を図ることで、四月以降の取り組みが具体化されることをめざした。また、保護者と共に作成したサポートブックなどを用いて「支援の手だて」を引き継ぐことで、入学後の環境の変化による混乱を最低限にしたいと考えた。あわせて「支援ツール・教材情報」も引き継ぎ、試行錯誤して取り組んだ結果見いだされた手だてを有効活用していただくこととした。幼稚部においては、自助食器、VOCA、個別指導記録、好きな歌、好きな遊びやおもちゃの情報を伝えた。

3. まとめと課題

就学に向けていくつかの取り組みを行ったが、その評価は入学後でないと明らかにならない。入学後に情報交換を行い、就学前の情報のやりとりがどのように活用されたかあるいは活用されなかったか、精査していく必要



Fig. 2 友だちと一緒に SRC でダンスをする様子 (6歳2ヶ月)

がある。保護者からは入学後の様子を聞き取り、就学支援の適否、不足している引き継ぎ情報を聞き取る、入学先からは児童の学習の様子や引き継ぎ資料の活用状況について評価していただく、等の取り組みが必要である。また、障害を併せ有する児童にとって、どの障害種の課題を優先すべきかについては、今後更に検討が必要である。就学支援を振り返るとともに、今後に向けて視覚障害幼稚園や聴覚障害幼稚園と協働してチェックリストや

記入用紙を開発していくことなども視野に入れたい。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、Aさんの保護者におかれましては、資料提供や写真の使用に関して、多大なご理解とご協力を頂きました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

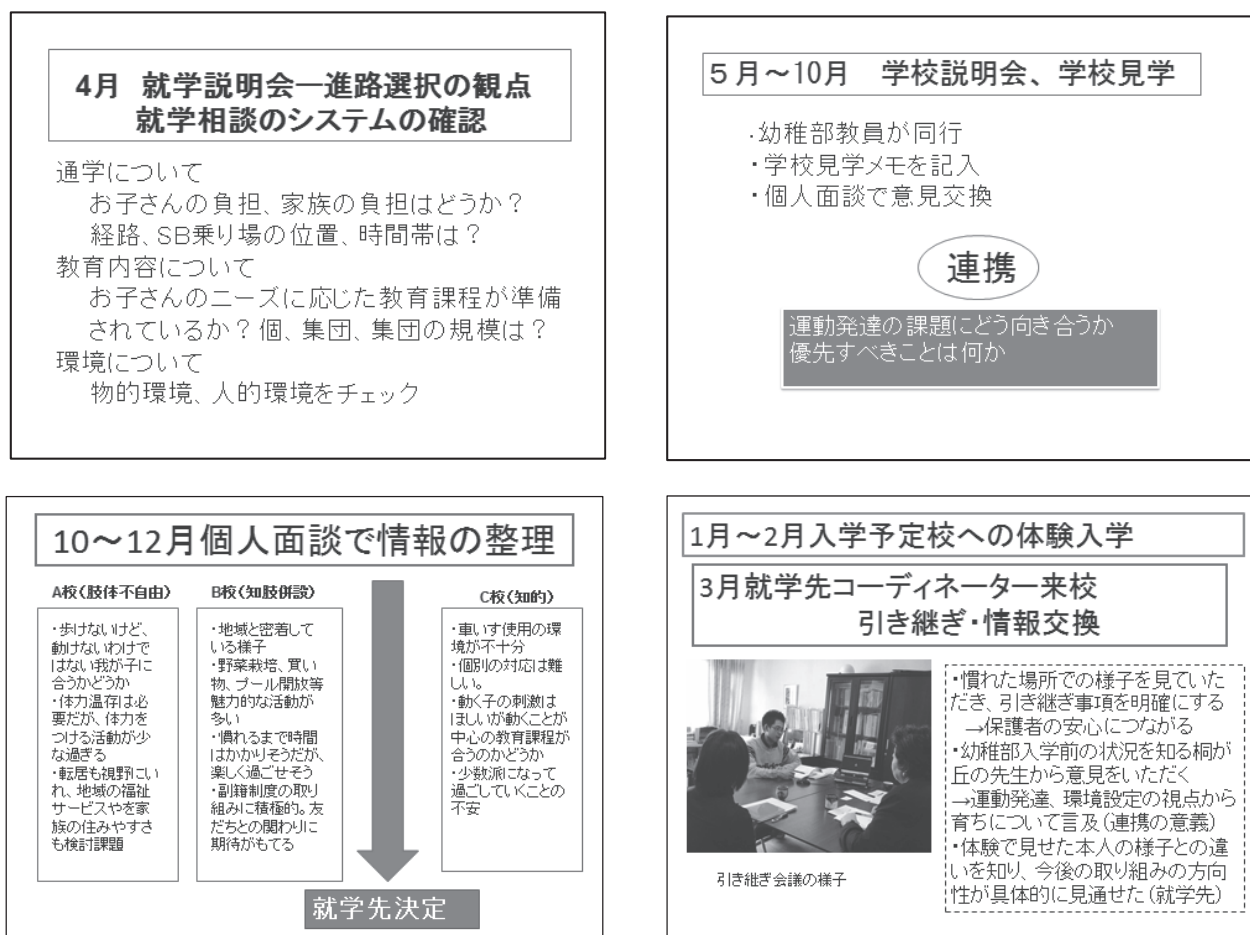


Fig. 3 A 児の就学支援の取り組み

Table 4 学校見学メモ（保護者の記述を改変）

見学者 母 ○○先生

見学日	201X年 6月○日 時間9:30～11:45
学校名 見学学級 教員名	D 立 E 特別支援学校 ----- F 先生（特別支援コーディネーター） 案内
通学について	スクールバス 学区ではないので、引っ越さなければならない。
学校の印象(物的環境など)	こじんまりしている アットホーム 住宅街の中にあり少し分かりづらいが、地域に密着している感じ 買い物など、近所の商店街を利用しているとか 校庭はやや狭い
先生や児童の様子（人的環境など）	のんびりしている 交流は G 小学校、H 中学校と行っているとのこと 副籍制度あり 地域のお祭りに参加 基本的に縦割り あつまりと給食は学年、クラス別
教育内容 (見学した授業の様子・感想など)	参観したのは音楽と体育 動ける子もそうでない子も楽しんでいる コミュニケーションをとりながら和気あいあいとしている 給食はみんなで向かい合うのではなく、一人ひとりで、ちょっと淋しい
お子さんがこの学級にいたら...	慣れるまでは時間がかかるかもしれない 活動にはのれそう
こんな支援があればいいのに...	子ども同士の関わりを促すようしむけてほしい
その他（次回の見学のポイント・確認したいこと）	・宿泊学習の有無 ・自立活動の内容 ・スクールバスのルート ・交流学习 ・保護者の参観の頻度 ・校外学習 ・生活学習の内容 ・他機関との関わり、連携

Table 5 肢体不自由を有する幼児への就学相談の記録から

保護者の願い	キーワード
子どもにあった就学先を探したい、子どもにあった学校で学ばせたい	
障害に対する医療的な対応を定期的に受けながらの学校生活が必要。複数回にわたる入院が予想されるため、学習や本人の気持ちの面をサポートしてほしい。	医療的なケアの必要性 ・ 定期的な入院や処置が必要
導尿や吸引などの医療的な処置が定期的に必要である。自立した学校生活を考えて、保護者の付添はなるべく減らしたい。	医療的なケアの必要性 ・ 保護者以外の対応や体制
兄弟の通園、通学に負担をかけたくない。	通学のしやすさ ・ 距離、方法、登校時間
肢体不自由があり、学校生活について行けないのではないかと不安。どのような援助が受けられるか？	肢体不自由の課題への対応 ・ 介助員などを含めた指導体制 ・ 安全な学校生活
車いすを必要としており、階段の昇降が一人で行えないが、安心して学校生活を送らせたい	肢体不自由の課題への対応 ・ EV などの施設面 ・ 安全な学校生活
できることを増やし、自立して行ってほしい	肢体不自由の課題への指導 ・ ADL ・ 移動方法、活動範囲を広げる
本人の特性に応じた教科指導を受けたい	肢体不自由の課題への指導 ・ 学習、教科学習 ・ 自立活動
子どもは、周りとの違いに気づき始めている。自信をなくさずよい所を伸ばしたい	主体性、自己肯定感
集団保育の中で見られた、同世代の子どもどうしの関わりから受ける刺激、成長を期待したい 友だちと楽しく、ある程度の大きさの集団で学んでほしい	コミュニケーション、社会性
自分のペースで自信をつけながら学んでほしい	社会性、学習
地域の中で成長して行ってほしい	社会性、地域
教科学習をさせたい、可能性を伸ばしたい、	学習

引用文献

高橋幸子・大蔵みどり・上田みどり・福谷憲司・吉井勘人・上俣
屋祐介・仲野みこ・野村勝彦・田丸秋穂・城戸宏則（2012）運
動面に配慮を要する知的障害幼児への発達支援の取り組み ～
複数機関との連携を通して～ 筑波大学特別支援教育研究

参考文献

丸山美和子（2006）小学校までにつけておきたい力と学童期への
見通し、かもがわ出版
本郷一夫（2006）保育の場における「気になる」子どもの理解と
対応―特別支援教育への接続、ブレーン出版
海津敦子（2006）発達に遅れのある子の就学相談 いま、親とし
てできること 日本評論社

Support for entering school in early nursery department of special needs education school

— Collaborated approach for infants with multiple disabilities —

Sachiko Takahasi * Mdori Ookura * Midori Ueda * Kenji Fukutani * Sdahiko Yoshii *
Yusuke Kmikariya ** Miko Nakaya * Ktuhiko Nomura Akiho Tamaru **

* Special Needs Education School for the Mentally Challenged, University of Tsukuba

** Special Needs Education School for the Physically Challenged, University of Tsukuba